



AUE Monthly

2010年 2月 1日

第 19 号

編集・発行
愛知教育大学広報部会
TEL 0566-26-2738
FAX 0566-26-2500



目 次

- | | |
|-----------------------|---------------------------|
| 行事予定(2月) | ・学生らによる「光藝展」 |
| トピックス | ・国立大学協会東海・北陸地区支部会議 |
| ・2009年度決算早期化の勉強会 | ・教職大学院を読売新聞が取材 |
| ・リポジトリ正式公開1周年記念インタビュー | ・造形文化コース卒業・修了展 |
| ・日本クラウンの草分け,大棟さんが特別講演 | ・訪問科学実験の学生代表に聞く |
| ・「eポートフォリオ」説明会 | お知らせ・報告・投稿 |
| ・第3回環境ミーティング | ・英語教育講演会,2月14日午後,名古屋市内で開催 |
| ・やり投げの学生を紹介するテレビ番組収録 | ・井戸准教授からのフィンランド便り |
| ・国際交流会館でもちつき | |
| ・イルミネーションが福祉施設で再点灯 | |

行事予定(2月)

- 1日(月) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 3日(水) 教務企画委員会(13:30~ 第三会議室)
学生支援委員会(13:30~ 第五会議室)
大学改革推進委員会(15:30~ 第五会議室)
- 8日(月) 役員会(13:30~ 学長室)
- 9日(火) 代議員会(13:30~ 第五会議室)
教育研究評議会(代議員会終了後~ 第五会議室)
- 10日(水) メンタルヘルス研修会(13:30~ 第五会議室)
- 15日(月) 役員部局長会議(13:30~ 学長室)
- 17日(水) 代議員会(13:00~ 第五会議室)
教員人事委員会(13:30~ 第五会議室)
財務委員会(15:30~ 第一会議室)
- 19日(金) 教育創造開発機構委員会(10:50~ 第五会議室)
- 22日(月) 第二期中期目標・中期計画策定委員会(9:30~ 第三会議室)
経営協議会(15:00~ KKRホテル名古屋)
- 24日(水) 保健環境委員会(10:00~ 第五会議室)
役員会(13:00~ 学長室)
大学改革推進委員会(15:30~ 第三会議室)

トピックス

2009年度決算早期化の勉強会(1/7)

他大学の財務担当者らも参加した「2009年度決算早期化」に関する勉強会が1月7日(木)

午後、本学第一会議室で開催された。本学だけでなく教育系大学、東海地区の大学担当者らにも呼び掛けたこの種の大規模な勉強会は初めて。

参加したのは宮城、上越、兵庫の各教育大学と名古屋大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学、三重大学、静岡大学の8大学の財務、経理、契約担当者23人、本学職員、関係者合わせて約50人。

本学の石井利通財務部長が「参加いただきありがとうございます。第1期中期目標・計画期間の最終年度で、決算早期化について監査法人の方を招いて勉強会を開催することにしました」とあいさつ。本学の決算スケジュール案などが示された後、講義に移った。講師は監査法人の公認会計士で、早期化実施プロセス、早期化の成功要因、本年度決算処理の留意事項などを説明した。財務の実務に関わる有益な情報に参加者は熱心に耳を傾けていた。



リポジトリ正式公開1周年記念インタビュー(1/8)



本学の研究・教育成果をインターネット上で公開する「愛知教育大学学術情報リポジトリ」は、1月5日(火)に正式公開1周年を迎えた。附属図書館ではこれを記念して同月8日(金)、附属図書館長でもある折出健二理事(副学長)にインタビューした。

日頃、副学長の立場での発言を求められることの多い折出理事だが、インタビューでは研究者としての側面をクローズアップしている。理事は大学時代からの研究課題である「生活指導」について語り、

研究を続けてきた「思い」、そしてこの課題にたずさわるきっかけとなった1冊の図書との出会いのエピソードを披露した。

第一弾となった坂柳教授のインタビューに続いて、充実した内容となっているので、ぜひ多くの方々に読んでいただきたい。

インタビュー内容はリポジトリトップページよりリンクして、次のURLで一般に公開している。正式公開1周年記念インタビュー

<http://repository.aichi-edu.ac.jp/interview/1stAnniversary.html>

日本クラウンの草分け、大棟さんが特別講演(1/13)

1年生を対象にした共通科目「平和と人権入門」の特別講演が1月13日(水)、本学421教室で行われた。講師は名古屋市を中心に子どもの入院患者らの激励をはじめ、世界中で活動をしているクラウン(道化師)、大棟耕介氏。日本におけるクラウンの草分け的存在。ピエロはクラウンの一種で、米国などではクラウンはステータスが高く、病院などに配置されるホスピタルクラウンやケアリングクラウンなど社会になくはない存在として浸透、定着しているという。

非常勤講師による年1回の講演で、この日はパフォーマンス、DVD上映、講演の3部構成で、まずサーカスなどに登場する衣装を身に付け、大きなトランクを持ったユーモラスな大棟さんが登場。立てたトランクに乗った大棟さんは拍手を“強要”し、風船でハートマークなどを作り、いすを額に載せてバランスを取るなどジャグリングを披露、笑いを誘った。DVDは落語家の桂三枝さんとの対談などで、大棟さんが会話コンプレックスからクラウンを始めたきっかけやその魅力にのめり込んでいった体験などを語った。大





棟さんは「ある日、私の芸を見ていた幼稚園児が前に来て“もっとまじめにやりなさいよ”と言った。子どもの能動性を引き出すことができたと思い、こんなうれしい褒め言葉はなかった」と語り、奥の深いクラウンの活動に桂さんも「勉強になりました」と真剣な表情で話していた。

講演では、スーツ姿で登場した大棟さんがクラウンの存在感を強調。正月にはサンタクロースの格好をして病院を回りお年玉を配ったといい、トランプのジョーカーはクラウンのことでキングやエースより強いのはそのステータスを証明しているなどと説明。「病気と闘う子どもたちが私と会って声を出し、前のめりになり、変化、成長していく。

10度、20度と（温度を）上げることはできないが、マイナス5度を零度に行うことがクラウンの重要な仕事かもしれません。この仕事を私はマラソンのように（ひたすら走り）続けることが大切だと考えています」と話すと熱心に聞いていた約60人の学生から感動の大きな拍手が送られた。

「eポートフォリオ」説明会(1/18)

「eポートフォリオに関する説明会」が1月18日（月）、本学第一会議室で開催された。

同説明会は、カリキュラム専門委員会が、これまで「教職実践演習」の開設準備の一環として、導入を検討してきた「eポートフォリオ」に対する教員の理解を深めるために、開催されたもので、約40人の教職員が参加した。



説明会では、インターネット接続・コンサルタント会社の担当者から、同社の教育機関向けポートフォリオ「manaba folio」について、その概要及び他大学での活用例等が紹介され、その後、レポート作成や成績評価等への対応、セキュリティ等の課題及び学生登録の方法等、具体的な利用方法について質疑応答が行われた。

質疑応答後、佐藤洋一理事から（1）学びの成果の保管支援（自己管理が苦手な学生へのサポート）、（2）学生同士の意見交換の場の提供（教員も参加可能）（3）担当教員側のレポートや試験解答にコメント記載し返却（自動的に保管も可能）など、万能ではないにしても有力な学習支援であるという理解を深めることができたのではないかと説明会をまとめる発言があった。また、理事は説明会ではあくまでも実施例として紹介したもので、本学が「eポートフォリオ」の導入に向けて「積極的に活用できる方策を探ることが当面の課題である」と述べた。

第3回環境ミーティング(1/19)



2009年度の第3回環境ミーティングが1月19日（火）、第一共通棟で開催され、保健環境センターの岩崎公弥センター長、久永直見教授、榊原洋子講師、職員、生協の専務理事、学生委員ら計16人が出席した。

岩崎センター長のあいさつに続いて環境リサイクル市などについて協議。リサイクルする物の収集日程や広報ポスター掲出など卒業時のごみ対策周知方法も決めた。また、大学側から、環境報告書によるデータ分析で本学が「省エネ日本一」として報道されたことの報告があった。

やり投げの学生を紹介するテレビ番組収録(1/19)

陸上競技のやり投げで活躍する本学学生，東野麻衣さん（中等，保健体育専攻3年）がフジテレビの番組に出演，その収録が1月19日（火）に本学で行われた。

番組は同テレビ系列（東海テレビ）の全国ネット「すばると!」。東野さんは1月20日（水）午後11時55分からの放送で期待される女性アスリートとして紹介された。

東野さんは昨年，東海学生秋季大会で初優勝，初の全国大会の日本学生陸上競技個人選手権大会で44.36mの記録で9位になった。また，全国教育系大学陸上競技大会では3年連続優勝に輝いた。自己ベストは46.28mという。

番組収録では，東野さんが学内で読書，勉強する姿や友人と談笑しながら歩く姿をはじめインタビューや練習風景，トレーニングの様子などが撮影された。やり投げの練習では40m前後の距離を次々と投げる好調ぶりを披露し，トレーニングでは夜まで，バーベルによる筋肉トレなどを繰り返していた。番組で今年の目標を「インカレ ベスト8!!」と色紙に書いた東野さんにインタビューした。



やり投げを始めた経緯を。

「中学でバレーボールをやり，高校でもバレーを思っていました，1年の秋に先生から肩が強いからやり投げをやらないかと言われて始めました」

やってみたらいい結果が出た？

「（競技が）自分に合っていたのかも。高校でインターハイに出場できたのも自信につながりましたね」

競技場での写真を拝見すると，お父さんもスポーツマンのようですが。

「父はスキーが得意ですが，スポーツ万能です。母もテニスをしますし，兄もバレーボール，バスケット，陸上などをしています。スポーツ一家と言えるかもしれませんね」



やり投げの魅力は。

「投てきは力で投げる競技と思われがちですが，力を入れすぎると，飛ばなくなります。力だけでなく技術が求められます。やり投げをしていて，肩の力を抜いて投げた時，距離が出る場合があり，その技術を磨くのが面白いですね」

将来の夢を。

「田舎に帰って体育の教師になることですね。できれば社会人になってもやり投げを続けて，記録に挑戦できたらいいですね」

国際交流会館でもちつき(1/22)

本学学生寮の学生の主催によるもちつきが1月22日（金），国際交流会館で行われ，留学生約10人を含む約40人が参加した。午後6時半すぎ，会館の玄関ホールに置かれた石臼に炊きあがったばかりの餅米が入れられ，学生，留学生らが代わる代わる杵を持ち上げては振り下ろした。湯気が立ち上る中，時折，笑い声がわき起こり，留学生はカメラで



撮影。1 升余のもちが 20 分ほどでつき上がり、それぞれがあんこ、きなこ、醤油、大根おろしなどを付けておいそうにほおばっていた。この日、用意された米は本学の水田で収穫された 7 升分で、すべてをつきあげて、午後 9 時ごろまで歓談しながら日本の正月気分を堪能した。

去年は寮で実施したが、今回は寮が工事中のため会館に移動し、留学生とのもちつき交流会が実現したという。企画、準備した学生は「予想以上の人が集まってくれました。国際交流がどこまで進んだかわからないが、みんな楽しそうに話していてよかった。来年ももちつきを通して寮生と留学生が交流できるといいですね」と笑顔で話していた。

イルミネーションが福祉施設で再点灯(1/23~2/20)



本学正門のロータリーに設置されていた学生が制作した巨大な龍のイルミネーションが本学近くの高齢者福祉施設に貸し出され、癒しの光を放ち続けている。

龍は頭部の高さが約 2 メートル、体長およそ 20 メートルという巨大さ。LED 約 3000 個が使用され、冬の夜を温かく照らし続けた。美術教育の 2 年生が制作、昨年 12 月 1 日(火)から本年 1 月 22 日(金)の夜間に点灯されてきた。点灯期間終了前に担当の宇納一公教授(美術教育)に福祉施設から貸し出してほしいとの

要望があり、1 月 23 日(土)に住宅街にある施設へ移設された。施設は高齢者が入居する「グループホームなごみや」で、2 月 20 日(土)まで点灯される予定。施設には十数人の入所者がいるが、2 階から龍をじっと眺める人や、楽しみにしていて夕方になると点灯を催促する人もいるという。散歩中の主婦は「そうですか、愛教大の学生さんが作ったんですか。近所が急に明るく、温かくなった感じがします」と話していた。施設関係者は「イルミネーションが入居者の癒しになり、地域の人々の憩いの場として利用され、これを機に本学学生との交流も深まればうれしい」と話していた。

学生らによる「光藝(こうげい)展」(1/25~1/31)

刈谷駅近くの刈谷市南桜町の空き店舗を利用した「アクアモール刈谷交流ひろば」(仮称)で本学学生らによるあかりの展覧会「光藝(こうげい)展 - みんなでつくるあかりの展覧会 - 」が 1 月 25 日(月)~31 日(日)、開催された。

昨年 1 月に本学、刈谷市駅前商店街振興組合、刈谷商工会議所、刈谷市の 4 者が「刈谷市中心市街地活性化のための連携・協力に関する



協定」を締結。こ

この活動の一環として、空き店舗の活用による学生の活動拠点づくりが進められ、この度店舗 1 階部分の改修工事が終わり、プレオープンイベントとして初の展覧会となった。

さまざまな素材を活かしたあかりをテーマにした展覧会で、作品は樋口一成准教授(美術教育)、樋口研究室 3 年生 6 人、本学非常勤講師加藤克俊氏(本学美術 OB)がそれぞれテーマ、材料を選び、素材を活かした個性豊かな照明を、1 人 2 点ずつ制作した。学生は授業の合間を利用して約 2 カ月間かけて制作したといい、材料も、沖縄の海岸で拾ったシーグラス、和紙、木材など多彩で、個性が光



った作品ばかり。

店舗は2階部分が未改修で全体が完成するのは4月の予定。今後、宇納一公教授（美術教育）をはじめとした美術教育、家政教育各講座の教員、学生が中心となって行うイベントが計画されている。本学総務課社会連携係は「本学の皆さんにはこの施設を使用していただき、愛知教育大学からのいろいろな情報を発信していきたい。興味のある方は、ぜひ係まで連絡をください。利用についてのアイデアも併せて募集しています」としている。

国立大学協会東海・北陸支部会議(1/28)

「国立大学協会東海・北陸支部会議」が1月28日（木）午後、名古屋市中村区名駅のホテルで開催された。2009年度第2回の会議で会員校の学長・総長全員を含む計29人が出席した。大学からは西頭徳三（富山）、中村信一（金沢）、福田優（福井）、森秀樹（岐阜）、興直孝（静岡）、寺尾俊彦（浜松医科）、濱口道成（名古屋）、松田正久（愛知教育）、松井信行（名古屋工業）、榊佳之（豊橋技術科学）、内田淳正（三重）、片山卓也（北陸先端科学技術大学院）の各大学学長、総長が出席。また、文部科学省から徳永保高等教育局長、国立大学法人支援課の寺門



成真企画官、国立大学協会から野上智行専務理事、日向野隆司企画部長、入口康彦企画部主幹付が出席した。当番校を務めた本学からは折出健二、佐藤洋一、村松常司の3理事（副学長）、富岡逸郎事務局長が陪席した。

支部代表の濱口総長が開会の辞に続いて国立大学の厳しい経営環境を指摘した上で「高等教育について国民に理解してもらえよう訴えていくことが必要」とあいさつ。松田学長が議長に選出され、「大学のあり方を含めて活発な意見交換を期待しています」と述べて議事に移った。支部推薦理事候補者の選出では投票の結果、名古屋大学と金沢大学が選出され、所属委員会、会長選出、インフルエンザへの入試対応についても議論があり、次期当番校を浜松医科大学とすることが紹介された。



この後、文部科学省との意見交換が行われ、徳永局長が「国立大学法人の検証で、国民からの意見聴取のほか文科省としても掘り下げた予備調査を行っていきたい」と述べるとともに高等教育を取り巻く環境、文科省の方針などを説明した。

最後に、本年度限りで学長を退任する3氏からあいさつがあり、記念写真を撮影して会議を終了、会場を移して、懇親会が行われ、出席者が歓談した。

教職大学院を読売新聞が取材(1/29)

本学大学院教育実践研究科（教職大学院）を読売新聞東京本社の教育ルネッサンス担当記者が1月29日（金）、取材した。同大学院の演習の様態などを取材したもので、記者によると、編集企画で学校、教員の悩み、不安が大きいとされる児童・生徒の保護者への対応について現象面ではなく、対応のあり方など本質的な問題解決法を示したいといい、同大学院のシラバスなどから本学を



取材することにしたという。

この日午前、記者は添田久美子准教授の「保護者との共同体づくり」の演習を傍聴した。演習は現職の小中学校教員5人が受講。添田准教授と小中学校の校長経験がある恒川武久、山田久義両特任教授の3氏の指導の下で「授業参観について」をテーマに課題、原因の分析が行われた。院生はそれぞれの現任校の授業参観日の内容、参加率、保護者の反応などについて現状を報告。授業参観の目的を「子どもの姿を見ていただく」「ともに子どもを育てていこう」などとした院生がいた一方で「行事の一つに過ぎず、(教職員が)目的を意識することはない」との報告も出された。

課題の整理に入り、両特任教授が「参観でどこを見てもらうか(教員間で)話されるのでは」「保護者の要望を加味して目的を設定することが大切」などと指摘。添田准教授は「まず、姿を見てもらう子どもとは誰か。保護者にとっては自分の子どもだが、それだけでいいのだろうか。クラス全体を見てもらい、同時に先生を見ていただく。この3つが授業参観の普遍的な目的で、教職員は再確認する必要がある。そこから信頼感が生まれ、保護者の声を聞き、授業参観のあり方を考えていくのがいいのでは」と議論をまとめると、院生はしきりにうなずいていた。午後は授業参観の改善方法、評価のあり方、授業参観のあるべき姿などについて考察を深めた。

造形文化コース卒業・修了展(1/30~2/21)



本学の卒業。修了生30人による「造形文化コース第19回卒業・修了制作展」の学内展が1月30日(土)~2月2日(火)、大学会館2階で開催。短期間だが、学内での展示は今回が初めてで、在学生、教職員らにとっては学生の作品を間近に鑑賞できる絶好のチャンスとなった。

陶芸、漆染織、ガラス、金工、プロダクトデザイン、美術史の各分野の作品が会館

の大集会室などに展示。作品は手に乗る大きさの陶芸から2疋の以上の織物まで色とりどりで、さまざま。丹念に制作した作品は細部まで見応えがあり、いずれも見る人を圧倒しそうな造形美ばかり。土曜日には卒業生も大勢駆けつけたといい、学生、教職員らは休憩時間を利用して熱心に見入っていた

作品の学外展は2月16日(火) 2月21日(日)、名古屋市東区大幸南1、名古屋市民ギャラリー矢田で開催される。入場無料。



訪問科学実験の学生代表に聞く



本学学生が小中学校で興味深い実験をする「訪問科学実験」は好評で、要請を断るほどの「人気授業」に成長した。本学の科学・ものづくり教育推進の取り組みを紹介した「理科教育ニュース」の連載が近く最終回を迎える。連載は理科教育講座の岩山勉教授らが執筆してきたが、今回は主役の学生が登場、実験に参加してきた松本龍之介さん(初等・理科3年)の原稿が掲載される。岩山教授に成果、課題などを語ってもらうとともに、新年度、参加学生のまとめ役、執行部代表を務める松本さんに貴重な体験談、抱負を聞いた。

岩山教授によると、訪問科学実験は2005~2008年

度、特色GPとして文部科学省により「科学教育出前授業等による学生自立支援授業」に採択された学生参加型授業の一つ。新年度も引き続いて実施される。地元刈谷市を中心に愛知県内の小中学校からの要請を受けて、年30回ほど実施している。成果、課題などについて岩山教授は「参加学生の目的意識を高め、学校側も子どもに体験をさせることができ、双方にメリットがあるのが続いてきた理由。学生の登録数が急減したのが懸念で、学生は今後、実験のアイデアを出すなど工夫してほしい。小中学校の教員が子どもと同様に実験に感動し、何回も訪問を要請してくるのは積極的に評価されている証では」と話す。「教員の理科離れ」防止の切り札の一つに成長してきた側面もある。

松本さんが訪問科学実験に参加したきっかけを。

「入学式でピラを見て説明会に。部活で剣道をやり、その先輩が参加しており、勧められて始めました」

これまでの実験で接した児童、生徒数は。

「1回50人として十数回しているので、数百人から千人近いかも知れません」

印象に残っている実験を。

「雲の実験ですね。ピーカーの中にぬるま湯を入れ、氷を入れたボールでふたをするもの。水蒸気が水滴となる様子を見せ、線香なども使って塵が核となり雲が成長することや飛行機雲について考えてもらう実験です」

子どもたちの反応、参加した自身の成果は。

「毎回、(子どもたちへの)あいさつで理科が好きかを聞きます。実験前は手を挙げる子どもが少ないが、実験後では半数以上が挙手してくれます。実験の意味はあると思います。活動を続けてよかったのは自信がついたことです。教育実習の理科の授業では胸を張って説明できました。子どもと話す機会を数多く経験していたおかげだと思いました」

文系の参加学生について。

「執行部は学年ごと約10人で構成しています。実験準備の打ち合わせなどで、文系学生は子どもが何を理解できないかわかっている気がします。自分たちの専門知識を前提に準備していて、文系学生から子どもの素朴な発想を聞いて驚くこともあります」

執行部代表としての抱負を。

「まず、参加学生の数を増やしたい。そして、新しい訪問実験校の要請に応じて、活動範囲を広げていきたいと思います」



お知らせ・投稿・報告

英語教育講演会、2月14日午後、名古屋市内で開催

「愛知教育大学英語教育講演会」が2月14日(日)午後1時20分から、名古屋市熱田区の市教育センター大講堂で開催される。小学校での外国語活動の必修化などを受けて、小・中・高校の英語教育が大きく変わりつつある中、質の高い授業展開や新学習指導要領を踏まえた授業実践のあり方など解説する。

対象は小中高の英語教員、学生、英語教育に関心のある一般の人。愛知県総合教育センター指導主事の犬塚章夫氏、文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課教科調査官の直山木綿子氏が講演。質疑応答もある。入場無料。

井戸准教授からのフィンランド便り (投稿)

早いものでフィンランドの滞在も4カ月が過ぎました。冬のピークも過ぎたように思われ、冬



至から1カ月が過ぎ、太陽も大分高い所まで昇るようになってきました。緯度が高いということは、夏と冬の日照時間の差が大きいということですから、刻々と日出、日没時間が変化していることが分かります。また、ダイアリーを購入しようと商品を見てみると、カレンダーの隅には日出と日没の時間が書いてあるものを多く見ることができます。冬の間太陽が高く昇らないこの国の人々にとって、その存在は私達日本人が感じている以上に大きいものなのかも知れません。

さて、本日はこの極寒のフィンランドから感じたことについて少しお話ししたいと思います。冬のピークが過ぎたと申しましたが、相変わらず寒いことになり変わらず、-20度近くまで下がることも珍しくない今日この頃です。外に出れば瞬時に鼻の中が凍っているのが分かりますし、じっとバスやトラムを待つのは10分が限界です。家には冷凍庫がありませんが、そんなものは必要ありません。ベランダに出しておけば全てカチンコチンです。そんな日本ではなかなか体験できない極寒のフィンランドですが、夏の終わりから今に至るまでを過ごして思ったことは、冬の景色の方が魅力的だということです。澄んだ空気、長く伸びたつらら、雪で覆われた白い街や樹氷、降る雪質も日本とは大分違います。少なくとも私はこれらに何度も感動しています。海は凍り、島まで歩いて行くこともできます。もちろん生まれて初めての経験ですから、海の上を歩いていると思うだけで何とも言えない感動があります。春が近づいていることを時々感じると、少し寂しい気持ちになってしまう程です。(多くのフィンランド人は春を待ちわびていますが・・・)ですから、今は限りある冬景色を存分に楽しむために、週末になると海や湖に行くことが多くなりました。



ここに来てから一番感じていることは、全てが単純で、悪く言えば何もありません。あるのは豊かな自然だけ。何か物を買おうと思ってもそこに選択肢はなく、外食をしようと思っても迷う余地はありません。日本のようなサービスもなければ、情報も多くありません。けれども時間と共にその何もなさ、単純さこそがこの国の魅力になっているということを感じるようになりました。



それに気付くようになったのはこの冬のお陰かも知れません。言葉に置き換えることが難しいのですが、凍った海の上を歩いたり、樹氷に感動するだけで、この国の多くのことが凝縮されて見えたような気がします。日本にいる時は日々物事や情報に溢れ、それが当たり前になっていて気付いていませんでしたが、それらは便利な反面ストレスにもなっていました。ここにはそんな便利さはありませんが、代わりにストレスもなく、必要最低限な物事と大自然だけがあります。それで充分なのだ、と感じさせてくれたのがこの冬の時間です。

私はアルヴァ・アアルトやカイ・フランク、タピオ・ウィルカラ、ティモ・サルパネヴァといった、この国が輩出してきた巨匠の歩んだ道を辿ってみたくてフィンランドに来ましたが、彼らのデザインの原点が少しだけ見えてきたような気がしました。

(井戸 真伸)

編集後記

「AUE Monthly」は本年度内、引き続いて一般公開することになりました。昨年12月号、本年1月号と2回にわたって試行的に公開し、このほど、当面の継続方針が決まりました。1月は休暇、センター試験などで学内イベントが少なく、本号は学生、理事のインタビューが3

本入りました。活躍する学生や教員，これを支える職員を学外に向かって紹介していくことは本学の魅力発信を目指す「月刊・愛教大ニュース」の趣旨に合致すると思いますが，ご意見をお聞かせください。一般公開をバネに内容充実に力を入れたいので，タイムリーかつ話題性のある「人物」「ニュースの素材」もぜひお寄せください。（N）

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

編集責任者:総務担当理事 折出 健二